

桂川正雄歌碑

池田八幡神社境内



西原にひきあげかぞくの
家たちて
ともしびの見え
牛の声する

牛の声する

正雄は、池田町四丁目生まれ、農業や印刷業のほか、町の役職につきながら短歌の道にも励みました。短歌を始めたのは20歳のころで、歌人で有名な若山牧水が池田の地を訪れたところだと言われています。また、岡麓が昭和20年（1945）に会染の内鎌へ疎開してきてから交流を深め、意欲的に短歌と取り組んでいます。斎藤瀏とも交わったと言われています。

正雄が昭和30年（1955）に、戦後の復興を詠んだ歌「西原にひきあげかぞくの家たちて ともしびの見え牛の声する」は、昭和32年（1957）皇室が主宰した詠進歌の御題「ともしび」に入選しました。入選後の昭和42年（1967）の文化の日に、正雄と関係があった人々によって、池田八幡神社の境内にこの歌を刻んだ歌碑が建てられました。

斎藤瀏・史歌碑

会染八幡宮境内

さいとうりゅう
ふみ
墨染の
それとまかへと
牡丹花の
むらさきにほふ
おほろなる月

やまくこの
はるの遠さよ
ゆふそらは
燃えておもひを
ふかむるらしも

(瀏)



(史)

将軍歌人と呼ばれた瀏は、明治12年（1879）に七貴村（現安曇野市明科）生まれ、松本の斎藤家の養子になりました。勉学に励み、軍人になる学校を出たあと日露戦争にも加わりました。戦争で見たり感じたりした体験をふまえて、歌の道をこころざし、歌人佐々木信綱について短歌を学びました。昭和11年（1936）の二・二六事件（軍人による反乱）に関係して軍人をやめることになり、歌人として活躍していましたが、太平洋戦争で東京が空襲を受けたため、戦火を逃れて池田町へ疎開して、短歌の活動を続けました。なお、娘の史も歌人として活躍しています。昭和58年（1983）に瀏をしたう池田町の有志により、会染の八幡宮境内に瀏の歌「墨染のそれとまかへと牡丹花の むらさきにほふおほろなる月」と史の歌「やまくこのはるの遠さよゆづぞらは 燃えておもひをふかむるらしも」とが同じ歌碑に刻まれています。